

2001

賀
年

A HAPPY NEW YEAR

子供の頃、母は日当たりの良い二畳間に座り、手仕事をしながら、昔話や、大きな屋敷だった生家での思い出話を聞かせてくれた。

ある時、母はふと思い出して言った。

「昔ね、屋敷に一人で居た時ね、どーんという地響きがして、奥の座敷に真っ黒な大蛇があらわれたことがあったのよ」

「天井から落ちて来たのかしらね。恐ろしかったねえ。そのうち真っ黒な鎌首を持ち上げてこちらを睨みつけたかと思うと離れの方へ消えて行ったのよ。

あれは「ヌシ」だよきっと。どの家にも必ずヌシが居て守っているんだからね。」

私は家を見廻した。日当たりが良いだけの小さな長屋の一角で、玄関に入ったかと思うと、裏口に抜けているような家だ。家の隅々まで知り尽くしている。

母の生家は、十数代も続いた大地主の家だった。

戦後アメリカ軍の指導で農地改革が施行され、敷地や地所の大方を取られたのであるが、それでも、子供には目を回すくらいに広い家だった。

幾つにも分かれた庭、お堀の名残りだという細長い池とその他にひょうたん池もある。家や蔵は戦災であとかたもなく燃えてしまったというが、その跡にはまた大きな母屋と、離れが建てられた。離れだけでも、うちの何倍も広がった。

あんなに大きな家ならどこかに「ヌシ」がいて家を守っているのは当然としても、こんな小さな長屋の片隅にそんなものがあるわけがない。隠れるところもないのだから。私は、ヌシがどこにもいるという母の話は信用しなかった。

母の実家の離れには祖父が住んでいた。祖母も住んでいたはずだけれど、祖母がそこにいたという記憶は薄い。離れの座敷の床の間の前には、祖父がどっかりと座り、煙管を咥えて睨みを利かせていた。

孫達にも家族にも恐ろしい存在だった。

祖父が不機嫌そうに煙管で煙草盆をコーンと叩くと、その音が屋敷中に響き渡り、皆背中をちぢめた。

祖父は家のものに何かを伝えるとき、煙管を使った。

時に、低くよく響く声で唸るのを聞いた事もある。

私は、母が見たと言う離れに消えた大蛇は祖父だったのではないかと思った。

母は、よく戦争の話をした。戦争中女学生だった母は、木炭バスに乗り、死体を踏み越えて軍需工場に通ったそう。空襲が激しくなり、屋敷はB29に幾度も焼夷弾を落とされ、母と姉さんは、刺さった焼夷弾を燃え出す前に持ち出して家を守ったそう。一緒に苦労した姉さんは、それは綺麗な人だったけれど、若くして結核にかかり、離れで一人寂しく亡くなったということだ。「美人薄命というからね」と母は言った。

結局屋敷も蔵も燃えて、地所もすっかり小さくなってしまったけれど、母は、何もかもなくなって「ほっとした」のだと言って、嬉しそうに小さな家を見まわした。

祖父は長生きをし、離れの奥座敷で立派な布団に包まれて大往生を遂げた。

私は、少しほっとした気がした。

母はその二年後、日当たりの良い二畳間で八ちに刺されたのがもとで、早死をした。

一家はその後、住みなれた小さな家を出た。

どの家にもいるというヌシがああ家にもいたのかどうか、

今でも分からない。

母は、よく戦争の話をした。戦争中女学生だった母は、木炭バスに乗り、死体を踏み越えて軍需工場に通ったそう。空襲が激しくなり、屋敷はB29に幾度も焼夷弾を落とされ、母と姉さんは、刺さった焼夷弾を燃え出す前に持ち出して家を守ったそう。一緒に苦労した姉さんは、それは綺麗な人だったけれど、若くして結核にかかり、離れで一人寂しく亡くなったということだ。「美人薄命というからね」と母は言った。

結局屋敷も蔵も燃えて、地所もすっかり小さくなってしまったけれど、母は、何もかもなくなって「ほっとした」のだと言って、嬉しそうに小さな家を見まわした。

祖父は長生きをし、離れの奥座敷で立派な布団に包まれて大往生を遂げた。

私は、少しほっとした気がした。

母はその二年後、日当たりの良い二畳間で八ちに刺されたのがもとで、早死をした。

一家はその後、住みなれた小さな家を出た。

どの家にもいるというヌシがああ家にもいたのかどうか、

今でも分からない。



COLUMN

鎌倉の猫事情 第十四話

ミルクホールのトラックは可愛い一匹の子猫を乗せ、鎌倉へと走りました。

ゲーニー君の花嫁は、助手席の箱の中でおとなしく座っています。

夏の日差しが車内を照りつけ、クーラーが少し弱くなるとハアハアと苦しそうな息をしています。どうやら暑がりなようです。道々あれこれと名前を考えました。

白い毛並みに、灰色の耳とシッポ、顔には薄いシマ模様、ブルーのパッチリとした丸い目。子猫らしい甘ったるい仕草に「スィービー」と名前がつけました。

鎌倉が近づく少し不安になってきます。

ミルクホールへ来て3ヶ月の間にすっかりわがままな乱暴者になってしまったゲーニー君は、この可愛いお嫁さんと仲良くできるでしょうか？

トラックがミルクホールに到着し、いよいよ対面です。スィービーの方はさすがに猫九匹と犬二匹等々の大家族に暮らしていただけあって動じません。

ゲーニー君は物心ついてから始めて見る猫に目を丸くしています。

やがて、スィービーの方からクンクンと匂いを確かめるように近づきました。スィービーがにじり寄ると、ゲーニーが少しづつ後ずさりして行きます。追い詰められたゲーニーは、真っ黒な鼻に皺をよせて小さく唸っています。思った通りです。

スィービーはそれほど気にもせず、ゲーニーの縄張りのトイレも使い、二つ並んだお皿のご飯も食べました。

花嫁は少し離れた所からそれを見つめています。

どうやら、攻撃するつもりはないようです。

スィービーが近づき、ゲーニーが鼻に皺をよせる

という関係は数日間続きましたが、一週間ほどすると

ようやく仲良くし始めました。二匹で並んでご飯を食べ、

一緒に遊ぶようになりました。そして、不思議な事に

この時からゲーニーはぴったりと人を噛むのをやめました。

ミルクホール全員の手や足から彼の歯型は消えました。

ゲーニー君はこの一週間ですっかり大人に成長したようです。

to be continued

